The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	知の理論としての志向的分析 : 志向的対象を手引きとして
Author(s)	家高, 洋
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 1995, 29, p. 17-28
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/12158
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

知の理論としての志向的分析

――志向的対象を手引きとして――

家高　洋

志向性（Intentionalität）は、フッサールの現象学の基本となる概念である。意識の本質を、～についての意識という事態に見出すのが、この志向性の概念である。

ところで、フッサールの課題の一つは、現象学によって、哲学の伝統的な諸々の対立を解消することにある。例えば、一九二七年のブリタニカ論文の第一稿では、「合理論（プラトン主義）と経験論、主観主義と客観主義、観念論と実在論」などの対立の解消が挙げられている。(1) このような課題は、フッサールの現象学が体系的に展開されて初めて生じたのではない。現象学が生まれ出た『論理学研究』において既に、現象学の分析は、この課題に沿って行われていたと言えよう。『論理学研究』は、論理的客観主義と心理学主義との間で、それぞれの立場を一方的に受容したり排除することなく、両者の関係が生じる事態を主題とした。つまり、「数学的真理」などの何らかの理念的な（ideal）存在者が、時間的に変化する我々のリアルな体験において現れるという事態を『論理学研究』は分析の俎上に載せ、この事態をより適切に捉えうる考察を「現象学」として切り開いたのである。

では、〜についての意識という、いわば自明の志向的な事態に関する分析や考察は、一体どのようにして、様々な学説や態度（Einstellung）の対立の解消という課題に応えることができるのであろうか。そもそも、この「解消」とはどういうことなのか。そのために志向的な事態に対して、どのようなアプローチが採られればよいのか。要するに、これらの問題は、諸学説に関する理論（Wissenschaftslehre）、より一般的には知の理論としての志向的分析の内実を示すことである。このような観点からフッサールの現象学、特に『論理学研究』を検討して、志向的な事態に関する理論の一つのスケッチを描くことが、本稿の課題である。(2)

我々は、志向的対象、特に感性的な志向的対象の在り方の問題系（Problematik）を手引きにして自らの課題に取り組んでみたい。その理由は、第一に、この問題系こそが、ブレンターノなどの志向性の実在論的な考え方に対してフッサール独自の現象学を生み出す一つの契機になったのであり、フッサールの議論を辿ることによって志向的分析の一般的な枠組みが取り出されると予想されるからである。そして、第二に、この問題系に対するフッサール自身の分析にも前提があることが明らかにされるからである。では、ブレンターノの志向的対象の基本的な問題点を確認することから検討を始めよう。

一

『経験の立場からの心理学』においてブレンターノは、心的現象の根本特徴を志向性に見出した。各々の心的現象、あるいは心的作用の本質は、その対象に関係していることにある、とみなされたのである。知覚作用には、知覚される対象が、判断作用には、判断される対象が関係している、という事態（志向的な事態）から、ブレンター

ノは心（意識）を考察しようとした。

さて、ブレンターノ学派にとって志向的な事態が問題になったのは、心的作用が志向的に関係している対象、つまり、志向的対象の位置づけに関するブレンターノの規定が曖昧であるためであった。ブレンターノによれば、志向的対象は、心的現象（意識）に志向的に内在している。[3] また、心的現象は、志向的である以外に、現実に存在しているが、色や音などの対象（物的現象）は、現象的で志向的にしか存在しないとブレンターノは主張する。しかし、ブレンターノは、対象は我々にとっての現象でしかないという、現象主義者の立場を拒否する。というのは、ブレンターノによれば、志向的対象は、「現実」に全く対応していないものではないからである。[4]

志向的対象に関するこれらの規定は、ブレンターノが前提にしている立場、すなわち実在論に基づいており、[5] 志向的な事態に即した考察から生じたのではない。ブレンターノの実在論的前提において、意識は、世界の中の一つの存在者とみなされており、その根本特性として志向性が考えられているのである。「意識に志向的に内在している対象」という考え方は、ブレンターノにおいては、「意識の外にある対象」という考え方と相関している。この場合、二種類の対象の関係や「意識の内と外」の区別は前提である以上、十分に解明されていない。この限りにおいて我々は、ブレンターノ的な実在論的前提を認めることはできない。後にフッサールが現象学的還元を導入しなければならなかった理由は、『イデーンⅠ』におけるように世界の無化（Vernichtung）が想定されうることや、意識の絶対的な確実性に基づくだけでなく、実在論的な前提に与する解明が曖昧で不十分であることにも依ると考えられる。

以上の検討から我々は、次のことを一般に認めることができるであろう。すなわち、何らかの対象的なものに関

係しているという志向的な事態に対して、この事態に関与していなかったり、あるいは、この事態の適切な規定や解明をなしえない概念や仮定、考察は、最終的には認められず、保持されえないということである。

二

ブレンターノの理論を踏まえ、志向的な事態を独自に解明したのは、トワルドフスキーであった。彼の『表象の内容と対象についての理論』は、フッサールの『論理学研究』第二巻の現象学的分析の枠組みに大きな影響を与えた。ブレンターノは志向的な事態を、意識（作用）と対象の二分法で考えたが、他方トワルドフスキーは、作用と内容と対象の三分法で考え、志向的な事態に即した分析に着手した。

トワルドフスキーによって新たに定式化された「内容」の概念は、フッサールの指摘のように（Ⅲ/1, 298）曖昧であるが、ここではその一般的な規定を取り出しておきたい。トワルドフスキーによれば、表象作用が向かっているのは、ブレンターノと同じく、その対象である。表象の内容は、表象の「中に（in）」あり、それを「介して（durch）」作用は、対象と関係しているのである。(6)

対象（あるいは客体）のように存在しない「内容」をどのように考えるのか、ということに応じて、志向的な事態に関する理論の枠組みは様々になる。『論理学研究』においてフッサールは、内容を「心像」とみなす写像理論を批判している。本節で我々は、この批判と、フッサール自身の解明とを見てみよう。

写像理論によれば、意識が直接に認識しているのは、対象の「像」であり、それは、意識に内在しているとみなされる。フッサールがまず批判することは、「内容」を像とみなすことである（XIX/1, 436）。「像」の概念によっ

ては、志向的な事態に即しつつ、それを根本的に解明することはできない。というのは、像が像であるためには、「原本」についての何らかの認識が必要だからであり、それゆえに、像の概念だけでは事態を十分に解明できないのである。像以外に、その「原本」も何らかの仕方で共に認識されているならば、二つの対象的なものが意識されていることになる。しかし、このことは、我々の経験とは反している。

そもそも、写像理論の主張のように、意識が直接に認識しているのは、像としての内容だけであるならば、像とは異なると考えられうる何らかの「原本」（対象「そのもの」）は、それ自身として原理的に認識されないのではないだろうか。写像理論には、実は、一つの前提がある。つまり、意識されることと無関係な対象「そのもの」が想定され、そして、その対象「そのもの」と、意識されている「内容」とが比べられるということである。例えば、感性的な対象の場合、我々に直観的に意識されているのは、その一つの面（前面）だけであり、これを、写像理論は、対象「そのもの」の像とみなす。一方、感性的な対象は、全面的には現れない以上、対象「そのもの」が我々に経験されることはありえない。それゆえに、写像理論は、原理的に経験されえない対象「そのもの」と、経験されている「内容」とを比較するという、二重の視点に基づいた不整合な論拠に依存しているのである。したがって、写像理論のこの難点を克服するためには、志向的な事態の中に一貫してとどまらなければならない。意識とは無関係に存在しうるものや、意識されないものを論拠として想定してはならないのである。

では、作用、内容、対象という三分法を踏襲しつつ、かつ、志向的な事態から離れない場合、志向的な対象と内容とは、どのように考えられるのであろうか。『論理学研究』第二巻第五、六研究の説明は、およそ以下の通りである。フッサールによれば、志向的対象は意識に内在せず、超越している。また、写像理論とは反対に、フッサー

ルは、特に明瞭な知覚の場合に意識されているのは、対象「そのもの」であると主張する。もちろんフッサールも、写像理論と同様に、感性的な知覚の場合、直観されているのは対象の一つの面であることを認める。しかし、対象の認識には、直観されている対象の一部以外に、その対象に関する非直観的な予期や意味（Sinn）が含まれて機能しており、その結果、対象は、その一部ではなくて「そのもの」として経験されうることをフッサールは明らかにしたのである。このようにして、対象を中心的な基準とする（実在論的な）知覚理論の前提、つまり、対象の「像」（一部）か対象「そのもの」（全体）かという二者択一は、具体的な経験においては、十分な根拠を持たないことが示されたのであった。

「対象」の概念のこの変化は、意識についての現象学的な分析によって生じたのであるから、このことは、意識と対象との間に本質的な相関関係（Korrelation）があることを示していると言えよう。現象学的分析の独自性は、この相関関係を、様々な現出（Erscheinungen）において見出し考察することである。現出に基づいて対象や意識を検討し規定すると言ってもよいだろう。したがって、現出を、写像理論のように何らかの「対象」から説明することは、対象と意識との相関関係を無視しているとみなされるであろう。

さて、実在論が主張する対象「そのもの」は、経験されている対象「そのもの」に基づいて、例えば、それを組み合わせることなどによって考え出されるならば、このことから、哲学などの諸説と現象学との関係は、一般に次のように言われるであろう。つまり、知の理論としての現象学は、諸々の説や態度が前提としている事柄を、志向的な事態の中で経験される諸現出に基づいて検討し、それらの説や態度の一面性を明らかにすることで、それらの真理要求の範囲を限定し、その結果、和解しがたいと思われる諸説の対立や区別を緩和するのである。(7)

以上のように（『論理学研究』に見られる）フッサールの現象学は、実在論的な前提の妥当性を問題にしたが、フッサールの議論にも何らかの前提があるのではないだろうか。このことを節をかえて検討してみたい。

三

フッサールによれば、志向的対象は、意識の中には存在せず、超越的である。では、意識に内在していないとみなされる対象が意識されるとは、どういうことなのであろうか。意識の内在な領域と超越的な領域という、いわば存在者の特徴に関わるような区別が、フッサールの説明に入り込み、解明されがたい問題を生み出していると思われる。フッサールの説明を概観した後、その問題点を指摘してみたい。

意識に超越した対象が意識されていることの説明のためにフッサールは、『論理学研究』において、意識の成素として非志向的な「実的（reell）」内容を導入した。この内容は、感覚与件やファンタスマ（Phantasma）であり、意識に内在している。そして、この内容を「解釈する」作用、統覚（Apperzeption）によって、意識から超越した志向的対象が現出する（意識される）のである。すなわち、実的な（内在的）領域と志向的な（超越的）領域、意識の内と外とが区別され、前者によって後者の成立が説明されることになる。[8]

はじめは記述心理学として刊行された『論理学研究』の説明は必ずしも一貫しているとは言えないが、[9]それでも、その説明には二つの問題が見出されると思われる。一つは、感覚与件などの実的な内容の規定と、もう一つは、この内容と不可分な作用の規定に関する問題である。

知覚における実的内容（感覚与件）は、第六研究において、その志向的対象に「類似しているか、あるいは同じ

である」(XIX/2, 623) と述べられている。ところで「類似」が主張されるためには、意識の実的な領域と、志向的な領域の両者が比べられなければならない。つまり、意識そのものが外から観察されなければならないのである。これは、前節で我々が確認したように、志向的な事態から離れるということを意味する。その上この説明は、意識そのものを、個体的な対象の一種として考えることになると思われる。なぜならば、実的な領域と、志向的な領域とが比べられるということは、両者の何らかの類似が想定されることになり、一方が志向的「対象」である限り、他方の意識自身も、それと同じ(あるいは、類似した)対象的な個体的性格を持つことになると考えられうるからである。以上の説明は、認識の成立に関わっており、現出に基づいた相関関係を主題としていないために、意識の志向的な性格を適切に捉えることができなくなっていると思われる。

ところで、意識と無関係に(あるいは無規定に)存在する対象や世界という前提を認めないということには、意識に一方的に影響を与える世界や、あるいは、世界を受容するだけの意識という前提をも認めないことが含まれている。というのは、この前提には、意識が存在しなくても世界が存在しうる、ということが含意されているからである。さて、世界の実在論的な前提から生じる、意識の受容性という考え方を拒否する場合、意識に関して、何らかの自発的な性格が認められるのではないだろうか。この想定によれば、例えば、意識の自発的な「構成(Konstitution)」作用が、対象や世界を「生み出す」とみなされる。結局このことは、いわゆる「観念論的な」前提を認めることになるであろう。『論理学研究』以来フッサールの現象学も、意識に何らかの作用の性格を認めているので、「観念論的な」側面を持つと思われる。[10] 意識を無規定のまま放置するわけには行かない以上、我々も意識に自発的な作用を認めなければならないようである。

しかし、意識の性格を、自発的／受容的という二者択一で考えることは、自明で必然的なことなのであろうか。もし観念論が、実在論の反定立（アンチ・テーゼ）であるならば、このような観念論は、現象学的分析が関わる「現出」を飛び越してしまうのではないだろうか。というのは、実在論が「即自的な」世界から受容的な意識を考えたのと同様に、この観念論も、意識の自発的「作用」から世界を考えるのであれば、両者とも、世界あるいは意識の一項のみから考えているので、その結果、志向的な相関関係に基づく考察ができなくなると思われるからである。ここでは、対象の「構成」という作用の問題系におけるフッサールの現象学の二つの「観念論的な」側面を指摘しておこう。

第一の側面は、現出や感覚与件などの多様から、同一の対象的な客体を「構成する」という問題設定である。(11) この捉え方において、現出などの多様は、対象認識の成立のための一つの契機にすぎなくなり、現出に即した分析が行われなくなるであろう。第二に、対象の「構成」が問われる以上、意識（あるいは自己）自身が問われないことである。この「観念論」の哲学上の問題は、実は、対象や世界の主観化や無化にあるのではなくて、意識（あるいは自己）が対象構成という観点からのみ考えられることにある。その結果、自己に関する様々な問題が、この観念論によっては適切に扱えないことになる。我々は、これら二つの「観念論的な」側面に関わらないフッサールの分析を概観して、本稿を終えることにしたい。

四

ここでトワルドフスキーの表象の構造の解明を思い出してみよう。彼によれば、表象の内容は、表象の中にあり、この内容を介して、表象の作用は、表象の対象と関わるのであった。この「内容」をフッサールの現象学における

「現出」と捉え直すことで、内容と対象との関係をもう一度考えてみたい。

内容としての「現出」の一つとして、我々は、射映（Abschattung）を挙げることができる。射映は、対象の一部ではない。というのは、射映を「介して」対象が現れる以上、射映は、対象の部分とみなされないからである。(12) ここで我々が確認できることは、現出としての内容は、対象と同系列にあると考える必然性がなくなることである。現出が対象に、いわば「属さない」ということによって、現出の問題系は、同一の対象の「構成」という問題系に関わる必然性はなくなるであろう。

このように、志向的事態は、その「内容」の考え方によって、様々に考察されうるであろう。第二節で我々は、対象「そのもの」の概念の変遷や、実在論的立場と現象学との関係の考察して次のことを明らかにした。ブレンターノの当初の枠組み、つまり、意識と対象の（実体的）区別に基づいた二分法（的思考）は、「内容」としての現出への考察によって、全く別の枠組みの中に包括されることになった。つまり、「内容」としての現出から、意識と対象との本質的な相関関係が見出され、この関係から両者を規定するという可能性が生まれたのであった。

また、フッサールの分析には、意識に関する「観念論的な」アプローチに対しても注目される「現出」がある。それは、意識や自己自身に関与している現出である。(13) すなわち、現出を「介することで」意識や自己自身が「構成される」という事態である。この、自己構成による自己規定の考察によってフッサールの現象学は、従来の観念論の枠組みをはみ出していると考えられるであろう。このような事態の一つとしてフッサールの分析の中では、『イデーンⅡ』における感覚感（Empfindnis）が挙げられる。特に、両手が触れ合い「構成しあう」二重感覚の分析が、この事態を表しているであろう（Ⅳ, 145）。そして、他者論も挙げられる。それは、第五デカルト的省察における、

自己からの他者「構成」という問題系よりもむしろ、他者（の存在）が自己の具体態を「構成する」（あるいは規定する）という事態である。いわゆる「超越論的他者」（Ⅵ, 187）の問題系である。

以上のように、様々な「現出」を切り捨てずに主題とし、そこから、対象的なものと、意識（あるいは自己）とを相互に規定することで、現象学は、諸々の学説と態度の対立を「解消」する課題に独自な仕方で応えることができるのではないだろうか。

注

（1）E. Husserl, *Phänomenologische Psychologie*, Husserliana Bd. IX, Martinus Nijoff, 1968, S. 253. なお、フッサールの引用は、すべてフッセリアーナ（フッサール全集）からである。引用に際しては、フッセリアーナにおけるその巻数のローマ数字と、頁数とを並べて表示する。

（2）我々の課題に沿ったフッサールの考え方を適宜検討するという仕方で考察を進めるので、フッサールの現象学自身に関する様々な解釈の検討には立ち入らない。

（3）F. Brentano, *Psychologie vom empirischen Standpunkt*, Bd. I, Felix Meiner, 1973, S.124-5.

（4）*Ibid.*, S.129-132.

（5）例えば、「真に存在するものは、絶対に現出せず、また、現出しているものは、真に存在していない」という主張にブレンターノの実在論的前提が表れている。*ibid.*, S.28.

（6）K. Twardowski, *Zur Lehre vom Inhalt und Gegenstand der Vorstellungen*, Philosophia Verlag, 1982, S.18.

（7）知の理論（学問論）としての現象学は、諸学説と交代することはできない。というのは、自然科学と現象学が入れ替われないように、各々の枠組みや前提の中でのみ適切に扱える事柄があるからである。

（8）この説明の枠組みは、『イデーンⅠ』においても（Ⅲ/1,192）見出される。

（9）例えば、実的内容も、意味を欠く対象的なものとして意識されると述べられている（XIX/1, 398）。

(10) フッサール自身は、自らの現象学を伝統的な主観的観念論と明確に区別している（Ⅲ/1, 120）が、何らかの観念論（例えば、「超越論的観念論」）であることは晩年でも否定していない（I, 118）。

(11) 以上の指摘によって、当然、対象「構成」に向けられたフッサールの分析の成果の評価が下がるということはない。対象の現出を手引きとして行われる現出論は、前節で確認されたように、対象「そのもの」の経験などの対象意識の構造を明らかにするという独自の成果があった。現象学的分析自身も多層的なのである。

(12) もちろん、この「介して」という事態を抽象して、射映を、対象の一部とみなすことは可能である。

(13) これは、例えば、『物と空間』において主題的に分析されている事態、つまり、運動可能な自己の位置や状態によって、対象の現れ方が動機づけられる、という事態ではない。この事態で明らかにされる自己は、同一の対象の「構成」に関与する限りでの自己であり、自己自身の構成は、主題となっていないからである。

（大学院後期課程学生）